

旭「敷島自治区」が新たな一步

やまき・ウィークリー

縮小時代の地域づくり

新見 克也

楽しみながら努力を尽くす

旭地区の敷島自治区が、3年かけて新たに「未来に向けた構造改革のための提言」を作り、地域が進むべき方向を軌道修正する形で発表した。

提言にはいろいろ書かれているが、ごく簡単に言えば「社会はこれから縮小していく。目をそらさず受け止めたうえで、これまで以上に地域を開き、守るべきものは未来へつなげ、超高齢化社会でも幸せに暮らせる地域を残すために楽しみながら努力を尽くす」という内容だ。

敷島自治区といえば、地域の総合計画をつくり、その柱である「移住定住の促進」に沿って、地域ぐるみで空き家を積極的に貸し出し、都市の子育てファミリーをどんどん受け入れてきた。そん

な成功例で全国に知られる敷島自治区が、地域の縮小を真正面から受け入れる提言をしたのである。「このままでは定住人口の奪い合いになるだけ」「戦う相手が違うぞ」と気づいたのだという。これまで移住定住に全力で取り組んできた敷島自治区だからこそ辿り着いた“悟り”だろう。

この軌道修正は移住定住の取り組みをやめることでない。今まで以上に取り組みつつも、それだけでは人口減少時代の課題は解決しないと腹に据えたのだ。

縮小の時代、社会も経済も縮小へ向かうに決まっているのだが、日本という国はそれを認めるのが苦手なようで経済成長を掲げたがる。敷島自治区はそんな嘘っぽちに影響されず、縮小時代の幸せな地域づくりに向かって歩み始めた。いつも行政をあてにせず自治を進めてきた敷島自治区らしい動きだ。

もちろん敷島自治区のなかにも限界集落的な所はあり、いざれ町内会の統廃合が進むはず。その進め方も、「ルールを決めて進めることではない」として、歴史の重みを踏まえ、住民の意思に寄り添って進めていくことをきめた。この提言は、来年度つくることになっている次期総合計画のベースにもなるようだ。